

【様式①】令和5年度 学校評価書(小・中・特別支援)

学校名 岐阜市立木田小学校
校長名 松井 実

市の重点課題	学校の重点項目	自己評価	達成状況	学校関係者評価委員会から	改善の方向
希望あふれる未来を自ら拓く力を育むための教育課程の編成	<ul style="list-style-type: none"> 「命の尊厳」「自己肯定感を育む」教育を推進していくことを中心に据えて教育課程を編成する。全学年部における研究授業を位置づけたり、児童の意識調査を年3回位置づけたりするなど、PDCAサイクルで実践をすすめる。 自己肯定感・夢を育てる教育の充実を目指し、将来について考えたり体験したりする学習の工夫・改善を図る。 「夢に向かって育つ」ことを核として、児童が主体となって取り組むことができる活動を仕組む。 授業で、児童が主体的・対話的で深い深い学びができるよう、一日に1回以上、適宜デジタル教科書や授業支援ソフトを活用する場を位置付ける。また、家庭学習支援ソフトを、個に応じて週末や長期休業に活用するよう働きかける。 英語科の授業等において、英語に慣れ親しむとともに、積極的にコミュニケーションを図る姿勢を育てる。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 全校集会や各教科の授業、総合的な学習の時間、行事等で、繰り返し「自他を尊重すること」「学び合い」「いじめの防止」等について、児童が考えたり活動したりする時間を位置付けた。 「自己肯定感」に関する児童へのアンケートで、「自分にはよいところがある」という質問に対し、12月に87%の児童が「ある」と答えた。 夢を育てる教育について、年間を通して夢や目標をもつことの大切さについて話を聞く場を位置付けたり「自分の夢」について語り合ったりする時間をもった。「将来の夢や希望をもっているか」というアンケートに94%の児童が「ある」と答えた。 創立150周年記念行事において、児童が主体となって様々な活動を展開した。本校の教育目標「自分で みんなと 創り出す」を児童が体現することができた。また、本校卒業生の方から「小さな夢から大きな夢へ」と題して講演をしていただいた。「自分も将来に向けてがんばりたい」と感想をもった児童が多かった。 児童は、ほぼ毎時間の授業でタブレット端末を用いて、自分の考えをつつたり、仲間の考えから学んだりすることができている。 英語科の授業で対話活動を楽しむ児童が増えているが、主体的にALTと対話したり、日常で使おうとしたりする姿勢には課題がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 自己肯定感が低い状況であった頃と比較すると、学習への参加の仕方にも主体性が見られるようになった。積極的に挙手発言する児童やペアやグループでの学び合い、話したり聞いたりする児童の姿を多く見ることができるようになった。 発達段階に応じた学びができていく。高学年になると、自分たちで考えて学ぶ姿がある。 創立150周年記念行事における記念講演の講師から、体験を通して大切にしている考え方を聞く経験が良かった。今後も、このように地域の人材から直接聞いて学ぶ機会を増やせるとよい。 児童が適宜タブレット端末を有効に活用することができるようになっている。 英語については、まだまだ課題が多いので、次年度以降、さらに主体的な対話活動が進むよう工夫ができるとよい。 	<ul style="list-style-type: none"> 「自己肯定感」に関する児童アンケートで、「自分にはよいところがある」の質問に、肯定的な回答の児童が増えている。今後は、児童会活動や学級活動、運動会などの行事等の計画・実施について、児童の主体性が発揮されるよう工夫改善を図る。 児童は、真面目に自分の役割を果たすことができる。今後は、さらに児童が主体となる活動、体験的な活動を重視し、児童が自己肯定感を育むことができる教育活動をさらに展開していくようにする。 児童は「将来の夢や希望をもっているか」のアンケートに94%の児童が「ある」と答えた一方で、保護者アンケートでは「日常的に夢や希望をもって臨む姿がある」と感じている方は50%程度に留まっている。「夢をもつこと」と「その実現のために努力すること」がつけられるよう、授業や各活動を工夫したり、引き続き児童の姿を通信やHP等で発信したりするようにする。 授業等における個人や仲間との学び合いでのタブレット端末の活用に加え、教科間や学年間の活用について工夫を図る。 英語学習では、引き続きALTと連携し、主体的に取り組む授業を工夫していく。
コミュニティ・スクールの機能の充実と岐阜市型小中一貫教育の推進	<ul style="list-style-type: none"> 家庭や地域と学校、中学校区が一体となったあいさつ運動を展開する。児童会や高学年などを中心に主体的な活動を全校へと広める。 コミュニティ・スクールの組織を生かしながら、「いじめ防止キャンペーン」を通して、学校と地域が一体となって児童の人権感覚を育てる場を設定する。 地域の障害者福祉施設との交流やその他の施設との交流を行う。 「木田ふれあい運動会」や地域の防災訓練について、主体的に関わる活動を計画し実施する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 児童会が中心になって「あいさつタッチ」週間を実施したり、保護者によるあいさつ運動を行った。 「いじめのキャンペーン2023」では、「いじめ防止キャラクター」や標語、ポスターなど児童一人一人が考える期間を設け、それを保護者や地域に公開することを通して、学校だけでなく、地域全体で人権感覚を磨く場をもつことができた。 公民館の「いきいきサロン」や社会福祉協議会を通じて、地域の方々と交流する機会をもつことができた。 地域と共同開催の「木田ふれあい運動会」では、防犯パトロール隊の方と行っ競技を取り入れ、直接感謝の気持ちを伝える機会となった。 	<ul style="list-style-type: none"> あいさつがよくできるかどうかは、学校だけの問題としてとらえるものではない。家庭や地域も含め、全体としてあいさつを交わし合う雰囲気があるとうい。あいさつを交わし合うことは、互いの心を開くことであるので、今後も、子どもにあいさつを求めただけでなく、大人からのあいさつの声かけができる木田地域であることが大切である。 いじめ防止キャンペーンは、継続していることで定着したものになっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 保護者アンケートの「子どもたちは、あいさつがよくできている」の項目で、肯定的な評価は50%程度であった。また、現状から「あいさつタッチ」の活動を行い、自分からあいさつできる木田小にしたいと、児童が主体的に挨拶活動を始めた。今後は、保護者・中学校と連携して、児童が主体となって挨拶のよさを実感できる学校へと成長させていく。また、職員や保護者、地域が児童の模範となれるようにする。 今年度、5年生社会科の授業支援に地域の米農家の方に講話していただいた。このような、教育支援ボランティアの開拓を進め、地域人材の支援を得て児童の学びが広がり深まるよう努める。
あたたかさや動きがいにあふれる学校づくり	<ul style="list-style-type: none"> 教材研究の仕方や教育相談の方法など、打合せなどでミニ研修を位置づけたり相談しやすい環境を整えたりして、全職員で教育活動を行う。 時間外勤務時間が月45時間以内及び年間360時間の範囲内となるよう、水曜日及び8の付く日を「ノー残業デー」として位置づけ、達成できるようにする。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 「給食アレルギー対応研修」「いじめ防止に関する研修」特別支援教育研修等、確実に実施した。学年部で授業研(公開授業研)を1回以上実施し、職員間で授業を見合い研究会を行いながら、指導力向上に努めた。研究推進委員長中心に年4回児童にアンケートを取り、児童の実態に応じた実践を積むことに努めた。 水曜日及び8の付く日を「ノー残業デー」として位置付け、職員が業務内容を精選しながら勤務することができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 各研修で、職員間の意見交換や指導ができていてよい。さらに、職員同士、得意分野について互いに学び合う研修を位置付けるとよい。 児童が、自己肯定感が高まり、「自分によりどころがある」と感じられるのは、学校全体として温かい雰囲気があるからと推測できる。教職員の働きやすさ・働き甲斐とも関連していると感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> 職員の指導力の向上や児童の実態に高まりが見られるよう、担任間で授業を見合ったり、教材を研究し合ったりする機会を、今年度以上にもつようにも、授業研究に努める。 時間外勤務が月45時間、年間360時間以内となるよう、引き続き水曜日や8のつく日のノー残業デーを位置付ける。また、一人一人の職員について校務の適正化を図る。
災害、事故、感染症、生徒指導事案等に対する安全性の確保	<ul style="list-style-type: none"> ヘルメットの着用、自転車の乗り方、安全な登下校など、交通事故に遭わない安全指導をする。 生徒指導事案に対し、関係職員で迅速に連携して対応にあたり、事案発生日の内に解決へ繋がる見通しをもつようにする。事案によっては、関係機関とも連携を図りながら、早期対応を図る。 「ここタン」の活用や、SOSを伝えやすい環境づくりをする。 多種多様な非常事態についての知識を高め、災害に遭遇したことを想定した訓練(HUG等)を実施する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 交通安全教室で自転車の乗り方など交通安全に関する指導を警察の方から受けた。一昨年度と無事故表彰を受けているが、今年度も児童の事故は0である。 生徒指導事案に対し、関係職員による情報共有を行うとともに、当日中に解決への見通しをもてるよう対応にあたった。 「ここタン」を活用するなど、児童が悩みを伝えやすい環境をつくり、対応することができた。 11月5日(日)には、地域の協力を得て地域防災訓練に全校児童が参加した。水防に関する講話を聞いたり、消火訓練をしたり、煙体験をしたりして、児童が自分の命を自分で守ることの意識をより一層もつことができた。また、年3回「命を守る訓練」を実施し、地震・火災・洪水等を想定して訓練を実施した。 保護者による防犯ブザー点検、自転車点検を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> 交通事故ゼロに対する意識が全校児童にある。ヘルメットの着用や自転車の適切な乗り方など、地域でも見届けを続けることが大切である。 「ここタン」を活用し、なかなか思いを表出できない児童でもSOSを出す手だてが取られていることがよい。 地域防災訓練へ児童が参加し、様々な体験ができたことは、安全教育をする上で意義があり有効である。 	<ul style="list-style-type: none"> 事故や生徒指導事案等に対し、引き続き早期発見・早期対応に努める。その中で、特に初動時、関係職員での情報の迅速な共有と、組織での対応について確認する。 水の事故に対して、危険な場所へ行かない指導はもちろん、保護者や地域と連携しながら、児童が「自分の命を自分で守る」ことができるよう、指導を工夫する。 地域で予想される災害に対し、児童が適切な避難方法等の知識を得られるよう、「命を守る訓練」の実施方の工夫改善を図る。
教育環境と学校財務環境の整備及び効果的な活用	<ul style="list-style-type: none"> ICT機器を効果的に活用し、教育効果を高められる授業づくりや家庭との連携、効果的な働き方づくりを目指す。 学校施設の定期点検を確実に実施し、適切な対処(修理・修繕等)を迅速に行い、安全な環境を整備する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> タブレット端末を活用し、授業支援ツール「ロイロノート」を有効活用して、自分の考えを表出したり、仲間の考えから学んだりすることができた。ICT機器の有効的な活用により、主体的・対話的で深い学びになっていた。 施設点検や備品点検を適切に行い、必要に応じて修繕等迅速に申請した。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業では、児童がタブレット端末を有効活用し、主体的・対話的で深い学びをすることが定着しつつある。 夏秋頃に増える校地内の雑草の手入れは、適宜行うことが望ましい。 保護者や地域も一緒に、児童の安心・安全のために努める。 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が、さらに主体的に学習できるよう、タブレット端末内のアプリの効果的な使い方や自主学習の進め方を提示していく。 引き続き毎月15日を目途に安全点検を実施し、必要に応じて迅速な修繕と環境整備に努める。

HPアドレス: <https://gifu-city.schoolcms.net/kida-e/>